

## 「意味盲」には何が欠けているのか

菅崎香乃 (SUGASAKI Yoshino)

---

### 本文

意味体験は、ウィトゲンシュタインが『哲学探究』第 II 部（以下、「第 II 部」と略記）において展開した多様な議論のなかでも、とりわけ注目を集めてきたテーマの一つと言える。意味体験には、多義語の意味を体験に結びつける議論や言葉の雰囲気といった語感にまつわる事例が含まれるほか、意味を体験することのない、いわゆる「意味盲」の想定もよく知られている。しかしながら、意味盲がどのような存在として想定されているのかということは、第 II 部をみるだけでは判然としない。本発表では、意味盲に欠けているのはどのような能力なのかという問題に絞って、ウィトゲンシュタインの思考を解明したい。そのためには、第 II 部の以下の記述を理解する必要がある。

「アスペクト盲」という概念の重要性は、アスペクトを見ることと言葉の意味を体験することの関係にある。というのも、「言葉の意味を体験しないひとには何が欠けているのか」とわれわれは問いたいからである。(xi 261 強調はウィトゲンシュタイン)

ここで言われているのは、意味盲に何が欠けているのかを考えるためには、アスペクト盲、すなわち「何かを何かとして見ることのできないひと」(xi 257) について理解する必要があるということである。では、アスペクトを見ることと意味を体験することのあいだにはどのような関係があるのか。

アスペクトを見ることの典型事例の一つは、ウサギ-アヒルの反転図形をウサギとして見たり、アヒルとして見たりすることである。同様の構造は意味体験においても見いだすことができ、たとえば「Bank」という語を「銀行」という意味で聞いたり、「ベンチ」の意味で聞いたりするといった事例を挙げることができる。それゆえ、アスペクトを見ることと意味を体験することの関係について、従来はもっぱら、図形や記号といった物理的な対象をどのように見聞きするかという共通点から語られてきた。

それに対して本発表では、両者の関連性について、ウィトゲンシュタインが上記のような解釈とは異なる論点も提示していることを指摘したい。それによって、意味盲を解明するためになぜアスペクト盲の考察が必要なのかを理解することができるとともに、意味盲には何が欠けているのかという問題にも結論が得られることになる。

この課題に当たるには、第 II 部の準備のために作成された手稿を辿るのが有益である。ウィトゲンシュタインのテキスト作成の過程とは、日々の思考をノートに書きつけることから始まり、それらの考察を精査したうえで抜粋し、テーマごとに並べ替えるといった編集作業を繰り返すものであったことが知られている。第 II 部も例外ではなく、計十一冊の手稿（MSS130 中盤～138, 169, 144. これらのうち MSS137 後半, 138, 169 は『ラスト・ライティングス』に載録）と二冊のタイプ原稿（TSS229, 232. 『心理学の哲学』 1、2 として死後出版）から作成されている。

これらのテキスト群を時系列に従って追うことで明らかになるのは、アスペクト盲に関する考察を通じて意味盲の問題が解明されるという考察の流れは、実際にウィトゲンシュタイン自身の思考が踏んだステップであったということである。手稿の比較的早い段階で、意味盲がどのような存在なのかについて、かれはある程度の見通しを得ていた。それは、意味盲とは「意味」についてある種の「像 (Bild)」を使わないひとだということである。換言すれば、意味体験とは、言葉の意味に関する問題でも、言葉を見聞きした際の体験の内容に関する問題でもなく、「意味」をどのようなものとして見るのかという、われわれのもの見方に関する問題なのである。しかし、あるものに対して特定の見方をするということの実相について理解するためには、意味体験に関する考察だけでは不十分であった。より具体的な知覚のレベルでの「何かを何かとして見る」こと、とりわけそれができないひととしてのアスペクト盲に関する考察が必要とされたのである。そしてその考察を経てようやく、意味盲にどのような能力が欠けているのかという問題にも、満足のいく結論が得られたのだと推測される。

本発表では、「意味」に関する「像」という上述の論点について、ウィトゲンシュタインがどのような考察を提示しているのかを明らかにしていきたい。この研究によって、意味盲という存在をウィトゲンシュタインがどのように理解していたのかを明らかにするとともに、意味体験とアスペクトという興味深い二つのテーマの関係性に関する新たな視点が提示できると期待される。